

北朝鮮の冷戦終結認識再考

研究代表者 磯崎敦仁（慶應義塾大学専任講師）

1. はじめに

金正日体制が掲げた軍事優先の「先軍」概念は、1990年代後半に「先軍政治」として定式化されてからより広義な「先軍思想」に発展し、2009年の憲法改正で「主体」概念と並び称されるようになった。金正日総書記は、国防委員会を「国家の中枢」に据えた、いわば「先軍」体制を構築したのである。「先軍」概念登場の直接的な契機がソ連・東欧の社会主義体制崩壊であることは明白であった。例えば1989年には、ルーマニアで政権に反旗を翻した軍がチャウシェスク大統領夫妻を処刑するという事件が発生し、中国では学生の民主化運動を軍が鎮圧するという天安門事件が発生した。それらは同じく社会主義を掲げる北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）に大きな衝撃を与え、体制護持のための教訓を残したことは間違いない。本研究の目的は、金正日「先軍」体制の構築について検討する前段階として冷戦終結、とりわけソ連・東欧の社会主義体制崩壊に対する北朝鮮の認識をいくつかの新資料を用いて再考することにある。

わが国においては、三つの先行研究がある。先行研究の存在は、本研究課題の重要性を物語っているともいえる。この分野で最も進んだ研究は、崔慶嬉「東欧・ソ連における社会主義体制の崩壊と北朝鮮」²である。『労働新聞』や金日成・金正日の著作を丹念に検証し、論点を明示している。主体思想の正統性を再認識するなど、北朝鮮にとっての社会主義体制の変質、社会主義市場の喪失について検討され、軍の役割に対する再認識についても議論が及んでいる。北朝鮮は、東欧諸国で起きた社会主義体制の変質を米国の「平和的移行」戦略による「外的要因」に基づくものと認識していたとされる。冷戦終結直後に執筆された鎌倉孝夫「朝鮮社会主義の理論的特徴」³は、「チュチェ思想は『社会主義の挫折』をどう見るか」について一節を割き、主に1992年1月3日付の金正日談話「社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線」に依拠して議論を展開している。さらに、同時代の全体像を把握できるものとして、平岩俊司「北朝鮮 危機からの脱出を求めて」⁴がある。北朝鮮が1990年代に直面した危機をいかに脱し、体制を護持しようとしたかの過程について描かれている。また、冷戦終結後、とりわけ金大中政権誕生以降、北朝鮮資料の解禁によって研究が質量ともに充実化した韓国においては、様々な論稿で同様の問題意識に触れているが、真正面から本テーマに取り組んだ論文は意外にも多くない⁵。

本研究では、先行研究で扱われてこなかった、1992年以降の朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』に掲載された記事や若干の証言を新たに検証対象に加えることで、問題をより深奥に捉えることを試みた。

2. 最高指導者の「労作」検証

(1) 金日成「労作」

冷戦終結、とりわけソ連・東欧社会主義の崩壊について金日成は複数の「お言葉」を残している。1990年5月24日付演説「わが国の社会主義の優越性をさらに高く発揚させよう」では、「いま帝国主義者達は、力の政策を堅持しながら社会主義を瓦解させるための、いわゆる『平和的移行』戦略を追求しています。帝国主義者達は、思想的文化的に浸透して人民達の革命意識を麻痺させ、『援助』を餌にして経済的に買収し、反社会主義分子達をそそのかして社会的政治的混乱を造成する方法で社会主義諸国を資本主義に逆戻りさせようと策動しています」といった状況認識が述べられている⁶。1991年9月26日付「日本

『岩波』書店社長の質問に対する回答」では、「遺憾ながら一部の人は、東西間の冷戦体系の崩壊と一部の国々における社会主義の挫折を、あたかも新しいものと古いものとの闘争で古いものが勝利し、歴史的流れの方向が変わっているかのように解釈していますが、問題をそのように見るのは誤りです。歴史が前進する過程で紆余曲折はありえますが、歴史発展の方向が変わるものではありません」との主張が展開されている⁷。

ソ連崩壊後の1992年3月13日・1993年1月20日・3月3日付談話「社会主義偉業の継承完成のために」では、「帝国主義者達は、旧ソ連や東欧諸国で社会主義が崩壊するや、わが国の社会主義を瓦解させようといっそう悪辣に策動しています。しかし、帝国主義者達はわが国の社会主義を瓦解させることはできません。わが国の社会主義は、旧ソ連や東欧諸国で崩壊した社会主義と同じではありません。わが国の社会主義は主体性が強く、人民大衆の中に深く根を下ろした社会主義です」といった表現で、北朝鮮の社会主義がソ連・東欧のそれとは異なるとの見解を示し、後段では後継者である金正日に従うよう促している⁸。1993年2月22日付書簡「青年達は党の領導を高く奉じて主体革命偉業を輝かしく完成しよう」では、「一部の国々で社会主義が挫折し、資本主義が復活した重大な事態と、それを契機として敢行される帝国主義者達と反動達の狂乱的な反社会主義、反共和国策動は、われわれの革命の前に大きな難関を造成しており、重大な任務を提起しています。わが人民がこれまで歩んできた革命の道も峻厳で困難でしたが、今日われわれが突破しなければならない難局は、その深刻さと厳しさにおいて類例のないものです」と危機感を隠していない⁹。しかし、ソ連・東欧の社会主義体制が崩壊した背景については、1993年2月20日付談話で「人民達の中で思想教養事業をしなかった」ことについていくつかの具体例を挙げながら説いているが、多くを言及してはいない¹⁰。

（2）金正日「労作」

金正日も演説や談話、論文といった「労作」を通じて、ソ連・東欧社会主義体制の崩壊についての持論を展開してきた。その頻度は金日成以上であった。金正日死後に編纂された『金正日百科全書』によれば、北朝鮮にとって1990年代は、「社会主義朝鮮の現代史における試練の時期であった」とされる。「社会主義偉業の擁護固守」のために金正日が講じた策としては、三つの業績として整理されている。第一に、「社会主義の科学性と勝利の必然性」を「鮮明」にしたこと、第二に、朝鮮人民軍最高司令官として任命された金正日が「全社会に軍事重視気風」を確立したこと、第三に、社会主義再建運動の基礎として「平壤宣言¹¹」を出したことである¹²。

既に崔慶嬉が整理しているように、1990年5月30日付演説「社会主義思想的基礎に関するいくつかの問題について」において東欧社会主義体制の崩壊に対する見解が示され¹³、1990年12月27日付演説「わが国の社会主義は主体思想を具現したわれわれ式社会主義である」では、ソ連・東欧の掲げる社会主義と北朝鮮の「われわれ式社会主義」が異なるものであることが明示された。1991年5月5日付談話「人民大衆中心のわれわれ式社会主義は必勝不敗である」も標題の通り「われわれ式社会主義」を主題としている。その間の1990年10月3日には、ドイツ民主共和国（東独）がドイツ連邦共和国（西独）に編入されている。

ソ連崩壊直後に出された1992年1月3日付談話「社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線」は、前述の通り鎌倉孝夫が着目している。金正日は、「人類が社会主義へと進むことは、阻むことのできない歴史発展の法則であります。社会主義が発展する過程で紆余曲折はありえますが、歴史発展の方向は変わりません」と述べ、一連の事態が「歴史的発

展の基本的な流れの中で見れば部分的で一時的な現象」であるとしてそこから教訓を求めている。その原因は、第一に、「社会主義の本質を歴史の主体である人民大衆を中心にして理解できず、社会主義建設で主体を強化し、主体の役割を高める問題を基本にして掌握できなかつた」、第二に、「社会主義と資本主義の質的な差異を見ることができず、社会主義の根本原則を一貫して堅持できなかつた」、第三に、「社会主義諸国の党相互間の関係で自主性にもとづく国際的連帯を強化できなかつた」ことによるとされる¹⁴。少なくとも表面的には、その後の「先軍」概念登場に関連付けられるような原因究明がなされているようには見受けられない。

1992年後半以降になると、金正日は社会主義の固守を訴えつつ、そのための処方箋を各分野で示すようになる。また、様々な「労作」を通じて、「帝国主義者達と反動達の反社会主義策動と反共和国策動」に対する警戒が強調された¹⁵。1992年7月23日付演説「革命的原則と立場を徹底して守ることについて」では、「新たな世代を革命的に教養しなければ、彼らが資本主義の『物質文明』に眩惑され、社会主義原則を捨てて資本主義を甦らせる道へ進んでいくこともありえます。社会主義をしていた一部の国々で新たな世代に対する教養事業をうまくやらないでいると、革命の第3世代、第4世代が安逸に豪華な生活を追求したあまり、資本主義に眩惑されて社会主義制度を転覆させ、資本主義を甦らせる道へ進んでいきました。今、アメリカ帝国主義者達は、わが国でも革命の第3世代、第4世代が革命的原則を捨てて変質することを望んでいます」とされた¹⁶。また、1992年10月10日付論文「革命的党建設の根本問題について」では、「各国における社会主義の挫折は、深刻な教訓を残している。ここでわれわれは、なぜ数十年間苦しい闘争を繰り広げ社会主義偉業を嚮導してきた党（複数）が一昼夜に崩壊するようになったのかということをしかりと知ることが何より重要である。それは、党の領導がすなわち社会主義偉業の生命線だからである」と述べられた¹⁷。同論文ではこれ以外にも重要な言及が続いている。1992年11月14日付談話「社会主義はわが人民の生命線である」¹⁸に続き、1992年11月20日付書簡「われわれ式社会主義をしかりと擁護保衛する真の社会安全活動家達を育てだそう」では、「社会主義を建設していた一部の国々で最近起きた事態は、階級闘争で重要な役割を担う社会安全機関が自らのなすべき務めができなければ、社会主義国家の独裁機能が麻痺し、社会主義を侵食するようになるということをよく見せてくれています」と繰り返された¹⁹。

金正日「労作」の中でもとりわけ大きな意義が付与されているのは、1994年11月1日付論文「社会主義は科学である」である。金日成死去後に発表された同論文は、この問題に対する金正日の理論的総括というべき位置づけになっている。「社会主義は科学である。各国で社会主義が挫折したが、科学としての社会主義は依然として人民の心の中に生きている。帝国主義者達と反動達は、社会主義を建設した一部の国々で起きた事態をめぐって『社会主義の終末』について騒いでいる。社会主義背信者達は、社会主義理念自体が間違っただけとしながら、自分達の醜悪な背信行為を弁護しようとしている。しかし、真理は隠し通せず抹殺できないのである。各国で社会主義が倒れたことは、科学としての社会主義の失敗ではなく、社会主義を変質させた機会主義の破産を意味する。社会主義は機会主義によって一時、胸の痛む曲折を経ているが、その科学性、真理性をもって必ずや終局的勝利を成し遂げるようになるであろう。」

そのほか、1993年3月1日付談話「社会主義に対する誹謗は許されない」や1995年6月19日付論文「思想事業を前面に出すことは社会主義偉業遂行の必須的要求である」等によって「社会主義背信者達」への非難とともに思想教育と理論の深化発展が訴えられた。

一方、「先軍」色を強め、それを概念化する契機となった記述は顕著な形で見出せない。1991年12月24日、「女性英雄金正淑同志（筆者注：金正日の実母）の誕生記念日に開催された党中央委員会第6期第19回全員会議で、偉大な首領様（筆者注：金日成）の提議によって²⁰金正日は朝鮮人民軍最高司令官となった。1992年4月の朝鮮人民軍60周年慶祝閱兵式に臨んだ金正日は、存命中に北朝鮮公式メディアで報じられた唯一の肉声となる、「英雄的朝鮮人民軍将兵達に栄光あれ」との一言を発した。さらに1993年4月9日には、最高人民会議第9期第5回会議において国防委員会委員長に推戴されている。金正日「労作」が「先軍」色を明確にしない反面、これらの事実は体制の「先軍」化を物語っていた。

3. 朝鮮労働党の機関紙・機関誌検証

（1）機関紙『労働新聞』

『労働新聞』は、北朝鮮住民に事実上の講読義務が課された朝鮮労働党中央委員会機関紙である。同紙は、北朝鮮指導部の認識変化を把握するのに有益であり、筆者も検証対象として重視してきた。例えば、1990年10月3日の東西ドイツ統一については、その二日後に次のような記事を論評抜きで掲載している。「報道によれば、3日、東西ドイツが統合して一つの国家となった。この日、ベルリン管弦楽団のホールでは二つのドイツを統合する公式行事が開催された。行事では、リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー大統領が演説した。そしてドイツ国会議事堂の前では国旗掲揚式があった。今年から10月30日を同国の国慶節として記念することになる。²¹」1989年12月25日のルーマニアのチャウシェスク大統領夫妻の処刑や1991年12月25日のソ連崩壊についても、『労働新聞』はその二日後に事実関係を報じている。『労働新聞』については、いくつかの先行研究が扱っているほか、日刊紙の特性上断片的な記事が多く、党見解の総体的把握には機関誌『勤労者』のほうがより適していると考えられるため、本研究課題の遂行においては補足的に用いることとした²²。

（2）機関誌『勤労者』

『勤労者』は、1946年10月25日に創刊された朝鮮労働党中央委員会の政治理論機関誌である。同誌は、「永生不滅の主体思想、先軍思想とその具現たる党の路線と政策を理論的に深く展開し、内外に広く宣伝することで党員達と勤労者達をわが党の唯一指導でしっかり武装させ、全社会を主体思想化するのに積極的に貢献することを自らの基本使命にして」おり、「中央と地方の党及び行政、勤労団体活動家達と社会科学部門、教育養成機関活動家達を基本読者対象」とするとされる²³。しかし、国外への搬出制限がかかった1992年以降は入手困難となり、韓国でもこれを十分に活用した研究は見当たらない²⁴。

月刊の『勤労者』は、長年にわたってその構成を変えておらず、冒頭に金日成や金正日の「労作」全文や「お言葉」の抜粋、それに準ずる新年「共同社説」等が掲載される。続いて無署名記事の「編集局論説」があり、「革命伝統及び党建設論説」、「政治思想論説」、「経済建設論説」、「科学文化論説」、「経験論説」、「祖国統一問題」、「国際問題」、「時事解説」と続くのが一般的である。時節に応じて特集が組まれたり、「偉大な指導者金正日同志の名言解説」等が挿入されたりすることもある。本研究主題に関わる重要記事は、「編集局論説」と「国際問題」解説において高い頻度で現われている。より精緻な議論は別稿を準備中のため、ここではその概要を紹介する。なお、北朝鮮は漢字を公式に廃止しているため、ここで提示する執筆者名は、金日成や金正日等の一部指導者を除き筆者の音訳である。

(イ)「編集局論説」

「編集局論説」は、党の路線が示される無署名記事であり、特集号を除き毎号 1、2 篇掲載される。1992 年から 1994 年にかけての「編集局論説」では、社会主義の固守が繰り返し訴えられた²⁵。金日成ではなく、金正日の「お言葉」を引用して議論が展開されていることが多い。例えば 1992 年 5 月発行号では、「社会主義を守れば勝利で、捨てれば死です」という金正日の「お言葉」を中心的主題に据え、「現代社会民主主義」、「ブルジョア『多党制』と『議会制』」、「『公開性』と『開放』」を通じて引きつけた反動的なブルジョア思想文化などを非難し、「われわれ式で生きていこう！」というスローガンの貫徹が訴えられている²⁶。1996 年 11 月発行号からは、「革命的軍人精神」を主題にするなど「先軍」色が明確な記事が現われるようになった²⁷。

(ロ)「革命伝統及び党建設論説」

「革命伝統及び党建設論説」では、党の路線が主に金日成の「革命伝統」に基づいたものであることが説かれる。例えば 1994 年 3 月発行号では、当時展開されていた軍民一致運動が抗日武装闘争の経験の根源とすることが示された。金日成の「労作」を引用したり、金日成が抗日革命闘士に提示したとされるスローガン「魚が水を離れては生きることができないように、遊撃隊が人民から離れては生きることができません」を紹介しながら、軍民一致の必要性が訴えられている。「人民に対する軍隊の献身的服務精神と軍民一致、これがわが革命武力をして強大な日帝と米帝を打ち負かすことができるようにした力の源泉でした」との金正日の解説が挿入され、論説末尾では金正日を中心に団結することが訴えられている²⁸。また、金正日の「革命歴史」が「革命伝統」に根付いたものであることを示す記事も見られる²⁹。

なお、1994 年後半からは、「革命伝統論説」と「党建設論説」に分離して掲載されるようになった³⁰。

(ハ)「政治思想論説」

「政治思想論説」では、金正日の指導思想を解説してそれを称える記事のほか³¹、金正日が国防委員長に就任した 1993 年 12 月頃からは「軍」を標題に挙げる記事が見られる³²。後者についてはいずれも金正日が卓越した軍指導者であることを宣伝するものとなっている。

「社会安全機関」、すなわち警察組織を主題とした記事には、次のような記述が見られる。「一連の社会主義国の安全機関が首領保衛事業を度外視していた時にも、われわれの社会安全機関は首領保衛を第一の使命に打ち立て、偉大な首領様と敬愛する將軍様（筆者注：金正日）をしっかりと擁護保衛することができた。」「社会安全機関は、帝国主義者達と革命の背信者達によって旧ソ連と東欧諸国で社会主義が挫折し、わが国に対する帝国主義者達と反動達の政治軍事的圧力と経済的封鎖、思想文化的浸透が、いつよりも執拗に敢行された 80 年代と 90 年代に、国家社会生活の全ての分野で法規律を強化し、あらゆる非社会主義的現象に反対することに集中攻勢をかけることでわが革命の内部陣地を盤石のように固め、労働階級を核心とする人民大衆中心のわれわれ式社会主義を法的にしっかりと保衛することができる。³³」同様に、1996 年 12 月発行号、1997 年 10 月発行号にも「非社会主義的現象」や「墮落した風」に対する警戒心を強める記事が掲載されている³⁴。

(二)「経済建設論説」

「経済建設論説」では、冷戦終結に対する経済的対応を明示する記事が見られた。具体的には、対外貿易の発展を訴えるものが散見される³⁵。その一方で、「自力更生」も訴えられている³⁶。

(ホ)「経験論説」

「経験論説」は、各分野における「経験」を具体的なエピソードとして紹介し、一般化するための論説とされているようであり、1993年3月発行号以降、「軍民一致」運動に関する記事が見られた³⁷。

(ヘ)「国際問題」

「国際問題」解説では、冷戦終結後の旧社会主義国の様子を紹介し、反面教師とするよう促す記事が毎号のように掲載された³⁸。ロシア以外の旧ソ連地域の混乱について触れるものもある³⁹。ロシア人に「現状」を語らせたものや⁴⁰、社会主義を放棄したアフリカ諸国について取りあげた記事も見られた⁴¹。1992年4月の「平壤宣言」を標題に含めた記事も複数ある⁴²。

これらの記事は、冒頭で概要を説明し、金正日の「お言葉」を引用した後で具体的な描写に入るのが一般的なパターンである。例えば、幹部政策に関する記事においては、金正日が次のように述べたことが紹介されている。「幹部達に変質すれば、党が病み、党の領導力と戦闘力が麻痺し、社会主義偉業を前進させることができず、革命の戦取物を守り抜くこともできなくなります。これは、旧ソ連と東欧諸国で社会主義が崩壊した過程を見せてくれる辛い教訓です。43」そして、ソ連や東欧諸国で発生した事例を具体的な個人名を挙げて描写し、要因を探っている。「ゴルバチョフの個人護衛隊長であったメドベージェフ長領は、ゴルバチョフが共産主義者ではなく『社会民主主義者でありブルジョア主義者』であることを知っていながら、彼を除去するためのいかなる対策も取らなかった。フルツコフとメドベージェフをはじめとするソ連の軍隊と社会安全機関の責任幹部達が革命の醜悪な背信者ゴルバチョフに反対し、闘争する代わりに、盲従盲動してゴマをすり屈従したのは、彼らに個人の利益より党と革命の利益をより貴重だと考え社会主義偉業を擁護固守するためには自らの生命も躊躇なく捧げるという革命的覚悟が無かったためである。44」

なお、「国際問題」解説では、国際的孤立脱却のために日朝国交正常化交渉が重要な役割を担うことを示唆する一方で、日本の過去の「野獸的罪行」についても同時に述べられた⁴⁵。

また、「国際問題」解説で扱われてきた内容の一部が、1996年11月発行号からは、「国際問題」の次に「資本主義の反動性と不敗性」と題する新たなカテゴリーで扱われるようになったほか⁴⁶、「南朝鮮及び国際問題」解説という分類も見られる⁴⁷。

(ト) その他

いずれのカテゴリーにも分類されていない署名論文もある。1993年7月発行号は、朝鮮戦争休戦40周年に際しての、いわば特集号となっており、掲載記事には金正日を軍の指導者として称えるものもあるが、それまでに開示されてきた冷戦終結認識が直接的な影響を与えているようには読み取れない内容であった⁴⁸。1997年2月発行号「偉大な領導者金正日同志の誕生55周年に際して」の特集で掲載された計13篇の記事は、いずれも金正日を称えたものであるが、「先軍」の傾向が強いものは1篇だけであった⁴⁹。1994年6月

発行号は、「編集局論説」や「政治思想論説」といったカテゴリーを一切付さず、特集名も明記しない特殊な構成になっている。金正日の業績を称える計10篇の論文が並ぶ中、「軍」を直接的な主題としたものは、朝鮮人民軍総参謀長による1篇だけであった⁵⁰。1994年12月発行号の冒頭では、金正日論文「社会主義は科学である」に関する特集が組まれ、「われわれ式社会主義」の優越性が強調されている⁵¹。

4. 各種証言検証

各種証言も必要に応じて活用すべき重要な新資料である。ここでは、筆者が複数の脱北者（北朝鮮離脱住民）にインタビューした結果のうち興味深い証言及び最近の刊行物から本研究課題の遂行に関わるものを一部紹介する。

（1）脱北者証言

脱北者へのインタビュー結果は、客観性の観点から活用が困難な側面もあるが、それを差し引いたとしても利用価値がある⁵²。筆者が行ったインタビューのうち特に興味深い回答には次のようなものがある。

第一に、冷戦終結をどのように知ったか、という質問に対しては、『労働新聞』のような北朝鮮メディアが公式的な論評を加える前に、『学習』の時間で断片的に知らされた」（女性）といった回答のほか、「元在日朝鮮人の帰国者達は、『学習』で周知されるよりも前に情報を得ていた。たびたび訪朝する在日朝鮮人の親族によって国際情勢を知っていた」（元在日朝鮮人、女性）との回答もあった。

第二に、冷戦終結をどのように捉えたか、自国に波及することを考えたか、という問いに対しては、「遠くの国の出来事と考え、衝撃は受けなかった。」（女性）、「北朝鮮に波及することも考えたが、それは決して具体的なものではない希望的観測だった」（元在日朝鮮人、女性）などの回答が見られた。さらに、脱北者ではないがある北朝鮮人からは、「北朝鮮体制が崩壊する可能性は考えず、むしろ連邦国家である米国の分裂を想定した」（男性）という回答も得た。

（2）刊行物における証言等

拉致被害者の蓮池薫氏は次のような証言を含む著書を公刊しており、大変参考になる。「月曜日は招待所の学習日（一般社会では土曜日が学習日）で、その日の午後は、指導員が出てきて講義や講演などをした。内容は時代によって変化があった。1980年代まではチュチェ思想の学習が多かったが、90年代に入る頃からぱたりとなくなり、代わりに指導者への『忠実性学習』や『偉大性学習』、民族主義や愛国主義を鼓吹するものなどが中心にすえられた。東欧の社会主義国家が崩れるなか、体制を維持するのに緊要な内容が優先されたといえるだろう。⁵³」「88年のソウルオリンピックのころから功を奏し始めた韓国政府の北方政策は、ゴルバチョフの新外交とも相まって韓ソ間の国交樹立をもたらし、韓中の接近を実現した。しかし、このときも何ら経緯を知らされていない国民は、ソ連を『社会主義の背信者』と非難する突然の政府の声明に、憤りよりも驚きと戸惑いを感じたはずだ。さらに80年代末から90年代初めにかけての東欧社会主義諸国とソ連の崩壊過程は、歳月が経ち、ほとぼりが冷めたころになってようやく、唯一生き残った北朝鮮式社会主義を称賛する反面教師的な根拠として言及されるにすぎなかった。だから国民の多くはいまも、ソ連の体制が何のために、どのようにして崩壊したのか、その全容は知らないだろう。⁵⁴」

また、「金正日の料理人」藤本健二氏は、次のような証言をしている。「あれは 1989 年 12 月、元山招待所で CNN を見ていた金正日将軍は、ルーマニアのチャウシェスク大統領が処刑されるというニュースに青ざめ、すぐ幹部三人に『六ヶ月学習』を命じた。改めて主体思想をたたき込み、体制を引き締めるためである。三人の中に張部長（筆者注：張成沢）もいた。部長は『六ヶ月学習』をこなし、また戻ってきた。⁵⁵」

2012 年半ばには、金正日夫人の高英姫氏を称えた幹部向けの記録映画「偉大な先軍朝鮮のお母様」の流出が日本の民間団体によって報じられるようになった。そこに挿入されている高英姫の肉声も参考になる。「敬愛する最高司令官同志が、突然、父なる首領さまを亡くされ、おあわてになった姿もじかに見ましたし、度重なる自然災害とひどくなるばかりの経済事情のせいで幹部らが悲鳴をあげ、あちらこちらに浮浪児が発生しているとの報告を受けられ、眠れぬ夜をともに過ごしました。そうした日々、われらが敬愛する最高司令官同志は、この難局を必ずや克服しなければならない、と何度もご自身に言い聞かせながら、苦しいときには朝鮮人民軍功勳合唱団の歌から新たな力を得て、先軍の道を進まれたのです。⁵⁶」

5. おわりに

本研究では、金正日体制が「先軍」概念を掲げるに至った前段階として、冷戦終結をいかに認識したかについて、先行研究が扱わなかった新資料を加えて考察を行った。新たに入手することのできた朝鮮労働党中央委員会機関誌『勤労者』では、とりわけ「国際問題」解説記事においてソ連・東欧で社会主義体制が崩壊した後の「破局的効果」や「悲惨な末路」について具体例を挙げて論じられており、危機感を煽りながら社会主義体制固守の必要性について繰り返し説かれた。ソ連・東欧の社会主義と区別するための「われわれ式社会主義」という概念は、1990 年という早い段階から多用されるようになっている。

その一方、体制護持のために「先軍」が必要だとの論理が表面化するのにはさらに時間を要した。1990 年代前半の『勤労者』においては、後に「先軍」概念へと発展する基礎となる「軍民一致」運動や「軍重視思想」に触れるものはわずかであった。現在では、ソ連・東欧社会主義体制の崩壊要因が「銃の変節」にあるといった説明がなされているが、1990 年代前半の金日成・金正日「労作」や党機関誌においては、それが明確に現われていたとは言い難い。本稿ではその概要を紹介したが、今後さらに検証を進め、精緻な議論を展開していきたい。

謝辞：本研究は、公益財団法人 JFE21 世紀財団の研究助成による研究成果の一部である。ここに記して感謝申し上げます。

1 拙稿「金正日とイデオロギー—北朝鮮『先軍思想』への道」『慶應の教養学』慶應義塾大学出版会、2008 年、59-92 頁、拙稿「金正日『先軍政治』の本質」小此木政夫編『危機の朝鮮半島』慶應義塾大学出版会、2006 年、283-304 頁。

2 崔慶嬭「東欧・ソ連における社会主義体制の崩壊と北朝鮮—北朝鮮の認識と国内的対応」『アジア地域文化研究』第 6 号（2009 年）、39-56 頁。

3 鎌倉孝夫「朝鮮社会主義の理論的特徴—チュチェ思想の意義と問題点」『現代と朝鮮（上）—ソ連崩壊後の朝鮮社会主義』緑風出版、1993 年、352-396 頁。

4 平岩俊司「北朝鮮 危機からの脱出を求めて」和田春樹ほか編『岩波講座東アジア近現代通史 第 9 巻—経済発展と民主革命 1975-1990 年』岩波書店、2011 年、319-337 頁。

- 5 例えば、高有煥「北朝鮮社会主義体制の構造的危機と金正日政権の進路」（韓国）『韓国政治学会報』Vol.30, No.2、225-245 頁、李泰建「脱冷戦時代北朝鮮の政治教育研究—北朝鮮指導部の冷戦体制崩壊認識と政治教育的対応分析」（韓国）『倫理研究』Vol.51、113-136 頁。
- 6 金日成「わが国の社会主義の優越性をさらに高く発揚させよう—朝鮮民主主義人民共和国最高人民会議第 9 期第 1 回会議で行った施政演説 1990 年 5 月 24 日」『金日成著作集』第 42 巻、平壤：朝鮮労働党出版社、1995 年、318 頁。
- 7 金日成「日本『岩波』書店社長が提起した質問に対する回答 1991 年 9 月 26 日」『金日成著作集』第 43 巻、平壤：朝鮮労働党出版社、1996 年、220 頁。
- 8 金日成「社会主義偉業の継承完成のために—抗日革命闘士達、革命家の遺児達に行った談話 1992 年 3 月 13 日・1993 年 1 月 20 日・3 月 3 日」『金日成著作集』第 44 巻、平壤：朝鮮労働党出版社、1996 年、107 頁。
- 9 金日成「青年達は党の領導を高く奉じて主体革命偉業を輝かしく完成しよう—朝鮮社会主義労働青年同盟第 8 回大会に送った書簡 1993 年 2 月 22 日」『金日成著作集』第 44 巻、96 頁。
- 10 金日成「ウルグアイ 3 月 26 日運動代表団に行った談話 1993 年 2 月 20 日」『金日成著作集』第 44 巻、80 頁。本談話は、中川雅彦「政治理念と政治エリート」『朝鮮労働党の権力後継』アジア経済研究所、2011 年、9 頁で引用されている。
- 11 「平壤宣言」とは、1992 年 4 月 20 日、48 名の党代表を含む世界 70 カ国あまりの共産党等の代表が署名した「社会主義偉業を擁護して前進させよう」と題する宣言を指し、北朝鮮では大きな業績としてしばしば言及される。
- 12 『金正日百科全書』第 2 巻、主体思想国際研究所、2012 年（電子版）、108 頁。
- 13 前掲、崔慶嬉、40 頁。金正日「社会主義思想的基礎に関するいくつかの問題について—朝鮮労働党中央委員会責任幹部への演説 1990 年 5 月 30 日」『金正日選集（増補版）』第 13 巻、平壤：朝鮮労働党出版社、2012 年、251-278 頁。
- 14 前掲、鎌倉孝夫「朝鮮社会主義の理論的特徴」、353-354 頁。
- 15 例えば、金正日「われわれ式社会主義をしっかりと擁護保衛する真の社会安全活動家達を育てだそう」『金正日選集（増補版）』第 17 巻、平壤：朝鮮労働党出版社、2012 年、194 頁。
- 16 金正日「革命的原則と立場を徹底して守ることについて」『金正日選集（増補版）』第 17 巻、68 頁。
- 17 金正日「革命的党建設の根本問題について—朝鮮労働党創建 47 周年に際して執筆した論文 1992 年 10 月 10 日」『金正日選集（増補版）』第 17 巻、125 頁。
- 18 金正日「社会主義はわが人民の生命線である—朝鮮労働党中央委員会責任活動家達と行った談話 1992 年 11 月 14 日」『金正日選集（増補版）』第 17 巻、185-191 頁。
- 19 金正日「われわれ式社会主義をしっかりと擁護保衛する真の社会安全活動家達を育てだそう—創立 45 周年を記念する社会安全部政治大学教職員、学生達に送った書簡 1992 年 11 月 20 日」『金正日選集（増補版）』第 17 巻、195 頁。
- 20 『金正日同志略伝』平壤：朝鮮労働党出版社、2008 年、354 頁。
- 21 「東西ドイツが統合して統一国家となった」『労働新聞』1990 年 10 月 5 日付。
- 22 先行研究の例として、李恒棟「労働新聞社説分析による北朝鮮政策の変化：1987-1996」『韓国政治学会報』第 31 集第 4 号、131-160 頁。また、『労働新聞』を検証対象とした代表的な研究は、高有煥編『労働新聞を通して見た北朝鮮変化』ソウル：ソニン、2006 年。
- 23 『光明百科事典』第 7 巻、平壤：百科事典出版社、2011 年、748 頁。
- 24 1991 年までの『勤労者』の全体像については、李教恵『北朝鮮主要基礎文獻解題集（Ⅲ）：「勤労者」解題』ソウル：統一研究院、1995 年が参考になる。近年における『勤労者』を用いた代表的研究としては、金榕炫「『勤労者』分析を通じた北朝鮮の軍事化談論変化研究：1946-2006」（韓国）『統一問題研究』2009 年上半期（通巻第 51）号、269-301 頁が挙げられる。金は、「実際に入手可能な 1991 年までの『勤労者』を分析対象とした。中国、日本等の地の研究機関を訪問、資料収集をしたが、1991 年以降の『勤労者』は入手できなかった」とする（271 頁）。
- 25 「編集局論説—革命的原則をしっかりと固守し社会主義の旗幟を高く掲げて進んでいこう」『勤労者』1992 年第 11（累計 607）号、27-33 頁。「編集局論説—社会主義はわが人民の生活

であり生命』『勤労者』1993年第3(累計611)号、21-27頁。「編集局論説—社会主義偉業を擁護固守して最後まで完成するための不滅の旗幟』『勤労者』1993年第4(累計612)号、10-15頁。「編集局論説—社会主義を守ることは時代の前に負ったわが党と人民の崇高な使命』『勤労者』1993年第9(累計617)号、10-16頁。「編集局論説—わが党は社会主義の旗幟を高く掲げていく革命的党』『勤労者』1993年第10(累計618)号、3-9頁。「編集局論説—親愛なる指導者金正日同志は社会主義偉業の強固な守護者であられる—親愛なる指導者金正日同志の古典的労作『社会主義に対する誹謗は許されない』発表1周年に際して』『勤労者』1994年第4(累計623)号、3-8頁。「編集局論説—偉大な首領金日成同志が創建された朝鮮民主主義人民共和国は最も強固で生活力ある社会主義政権』『勤労者』1994年第9(累計629)号、3-8頁。

²⁶ 「編集局論説—社会主義を固守すれば勝利し捨てれば滅びるといふのは現時代が見せてくれる深刻な教訓』『勤労者』1992年第5(累計601)号、8-14頁。

²⁷ 「編集局論説—革命的軍人精神に倣って『苦難の行軍』で栄誉ある勝利者になろう』『勤労者』1996年第11(累計655)号、3-8頁。「編集局論説—敬愛する最高司令官金正日同志の領導を受ける朝鮮人民軍は必勝不敗である』『勤労者』1996年第12(累計656)号、16-20頁。「編集局論説—革命的軍人精神で社会主義朝鮮の気性を轟かせよう』『勤労者』1997年第8(累計664)号、14-19頁。

²⁸ 李在男「軍民一致は抗日武装闘争勝利の重要要因』『勤労者』1993年第11(累計619)号、34-39頁。

²⁹ 金柄益「親愛なる金正日同志の革命歴史は文武忠孝を兼備した人民の指導者の偉大な歴史』『勤労者』1994年第3(累計623)号、29-35頁。

³⁰ 次の記事は「党建設論説」である。朴昌奉「祖国の安全と社会主義戦取物をしっかりと保衛することは党細胞が握らなければならない重要課業』『勤労者』1994年第11(累計631)号、55-60頁。

³¹ 梁龍圭「親愛なる指導者金正日同志の思想理論は金日成主義に基づいた偉大な革命思想』『勤労者』1994年第4(累計624)号、43-47頁。

³² 蔡秀哲「党と軍隊は人民の運命であり生命』『勤労者』1993年第11(累計619)号、21-27頁。李能勳「親愛なる金正日同志を最高司令官として奉じた人民軍隊は無敵の軍隊』『勤労者』1994年第7(累計627)号、15-21頁。柳柄悦「敬愛する最高司令官同志の領導はわが人民軍隊の生命』『勤労者』1994年第12(累計632)号、50-56頁。趙成浩「偉大な将軍様はわが人民と人民軍軍人達の心の柱』『勤労者』1996年第1(累計645)号、30-34頁。・玉奉麟「敬愛する最高司令官金正日同志は偉大な軍事戦略家であられる』『勤労者』1996年第2(累計646)号、21-26頁。金河圭「敬愛する金正日将軍様は主体の領軍術でわれわれの革命武力を懸命に導かれる天下第一名将であられる』『勤労者』1996年第4(累計648)号、53-58頁。呉明花「党と軍隊と人民の不敗の統一団結は革命勝利の決定的担保』『勤労者』1996年第4(累計648)号、59-64頁。兪明悦「偉大な金正日同志は白頭山型の将軍であられる』『勤労者』1996年第12(累計656)号、21-25頁。金鎰喆「敬愛する最高司令官同志は非凡な領軍術を持たれた鋼鉄の霊将であられる』『勤労者』1996年第12(累計656)号、26-30頁。金寛熙「党と軍隊、人民の渾然一体は社会主義のわが国、わが祖国の隆盛繁栄のためのしっかりした担保』『勤労者』1996年第12(累計656)号、36-40頁。

³³ 白鶴林「社会安全機関はわが党の栄光なる政治保衛隊』『勤労者』1995年第11(累計643)号、29-34頁。

³⁴ 黄進沢「非社会主義的現象は社会主義を啄む危険な毒素』『勤労者』1996年第12(累計656)号、58-62頁。黄進沢「墮落した風を防いで全社会に革命的生活気風を打ち立てることは社会主義を固守するための重要な要求』『勤労者』1997年第10(累計666)号、55-59頁。

³⁵ 康正模「変化した環境の要求に合わせて対外貿易を発展させることはわが党の重要な方針』『勤労者』1992年第12(累計608)号、58-61頁。李成大「対外経済関係を発展させることはわれわれ式社会主義の威力を強化するための重要担保』『勤労者』1993年第6(累計614)号、53-57頁。金允赫「農業第一主義、軽工業第一主義、貿易第一主義に出ていくことはわが党の戦略的方針』『勤労者』1994年第1(累計621)号、52-56頁。李成大「対外市場を積極

的に開拓することは対外貿易を発展させるための重要方途『勤労者』1994年第5(累計625)号、62-66頁。金秋成「変化した現実的条件に合うように貿易事業で転換を起こそう」『勤労者』1996年第9(累計653)号、62-67頁。

³⁶ 安熙鉄「自力更生、艱苦奮闘の革命精神を高く発揮するのは社会主義経済建設を急き立てるための重要担保」『勤労者』1993年第1(累計609)号、51-55頁。

³⁷ 姜致模「軍民一致模範軍爭取のための軍党委員会の指導」『勤労者』1993年第3(累計611)号、79-84頁。李世映「軍人達の中で軍民一致の伝統的微風を高く発揚させるための組織政治事業」『勤労者』1993年第3(累計611)号、85-90頁。

この他、次の記事が注目される。李仲九「敬愛する最高司令官同志の命令貫徹で成し遂げられた組織政治事業経験」『勤労者』1996年第1(累計645)号、70-75号。元熙得「社会主義遵法気風を徹底して打ち立てるための党的指導で得たいくつかの経験」『勤労者』1996年第1(累計645)号、76-80頁。韓千浩「革命的軍人精神を高く発揚させるための組織政治事業経験」『勤労者』1997年第10(累計666)号、85-90頁。

³⁸ 金華千「発展した資本主義諸国の『物質的繁栄』の真相」『勤労者』1992年第6(累計602)号、92-96頁。崔哲雄「資本主義はカネが人間を支配する原理に基づいた腐敗した社会」『勤労者』1992年第8(累計604)号、86-90頁。権民準「人民達が社会主義の道へ進んでいくのは妨げることのできない歴史の流れ」『勤労者』1992年第12(累計608)号、85-90頁。朴賢圭「社会主義を捨てれば死だ(1)―資本主義に復帰した国々で日増しに深刻になっている政治的危機」『勤労者』1993年第5(累計613)号、91-96頁。朴賢圭「社会主義を捨てれば死だ(2)―資本主義に復帰した国々における深刻な経済的破産」『勤労者』1993年第8(累計616)号、91-96頁。鄭東旭「指導者に誤ってめぐり会うのは人民達にとって最も大きな不幸―旧ソ連と東欧諸国で社会主義執権党と社会主義制度が崩壊した歴史的教訓」『勤労者』1994年第1(累計621)号、92-96頁。安敏洙「ボスニアヘルツェゴビナ紛争について」『勤労者』1994年第3(累計623)号、92-96頁。崔龍海「社会主義の運命は青年達の運命―社会主義が挫折して資本主義が復帰した国々が見せてくれる教訓」『勤労者』1994年第5(累計625)号、90-96頁。金基龍「権勢と官僚主義は社会主義社会における最大の禁物―社会主義が挫折して資本主義が復帰した国々が見せてくれる教訓」『勤労者』1994年第7(累計627)号、78-84頁。金光雨「社会主義祖国と知識人達の運命―社会主義が挫折して資本主義が復帰した国の知識人達の運命が見せてくれる教訓」『勤労者』1995年第2(累計634)号、91-96頁。朴勤培「社会主義に関する理論を全面的に体系化して集大成した不滅の社会主義大憲章―偉大な領導者金正日同志の古典的労作『社会主義は科学である』に対する国際的反響」『勤労者』1995年第4(累計636)号、92-96頁。金亨雨「冷戦終結後多極化している世界情勢の重要特徴」『勤労者』1995年第5(累計637)号、91-96頁。金錫律「幹部達が変われば社会主義を守り抜くことができない―一部の国々で社会主義が崩壊した過程が見せてくれる教訓」『勤労者』1995年第6(累計638)号、90-96頁。金相祿「社会主義は必ず勝利する―旧ソ連と東欧諸国における社会主義のための人民達の闘争」『勤労者』1995年第8(累計640)号、92-96頁。朴賢圭「民族的不平等と隷属は資本主義復帰の必然的産物―社会主義が挫折した国々の現実が見せてくれる歴史的教訓」『勤労者』1995年第11(累計643)号、92-96頁。金容浩「社会主義思想の変質がもたらした破局的効果」『勤労者』1995年第12(累計644)号、86-90頁。池在竜「首領と革命の先輩達を冒瀆して彼らの業績を抹殺することは最も卑劣な反革命的罪行」『勤労者』1996年第4(累計648)号、92-96頁。朴賢圭「革命の道で変節と投降は死―旧ソ連と東欧諸国で社会主義に背反した変節者達の悲惨な末路」『勤労者』1996年第5(累計649)号、85-90頁。李準河「帝国主義者達と反動達の反社会主義謀略宣伝の破産の不可避性」『勤労者』1996年第8(累計652)号、86-90頁。金光雨「歴史と社会発展の退歩は復帰した資本主義の必然的産物」『勤労者』1996年第9(累計653)号、91-96頁。

³⁹ 李承革「独立国家協同体で日増しに先鋭化している民族間及び地域間紛争」『勤労者』1993年第1(累計609)号、91-96頁。李承革「独立国家協同体で日増しに先鋭化している民族間及び地域間紛争」『勤労者』1993年第2(累計610)号、91-96頁。

⁴⁰ ニーナ・アンドレイバ「社会主義偉業は必勝不敗である」『勤労者』1992年第11(累計607)

- 号、81-95 頁。イワン・ロボダ「強力な打撃」『勤労者』1993 年第 9 (累計 617) 号、87-96 頁。
- 41 張昇吉「多党制がアフリカ諸国に及んだ害毒的效果」『勤労者』1993 年第 11 (累計 619) 号、91-96 頁。
- 42 金容淳「平壤宣言は自主時代社会主義のための闘争の偉大な旗幟」『勤労者』1992 年第 10 (累計 606) 号、90-96 頁。金養建「平壤宣言の旗幟の下に社会主義を再建するための闘争(1)」『勤労者』1993 年第 9 (累計 617) 号、81-86 頁。金養建「平壤宣言の旗幟の下に社会主義を再建するための闘争(2)」『勤労者』1993 年第 10 (累計 618) 号、92-96 頁。金養建「平壤宣言は社会主義偉業を新たな歴史的進軍の軌道の上に乘せた偉大な綱領」『勤労者』1997 年第 5 (累計 661) 号、92-96 頁。
- 43 金錫律「幹部達が変質すれば社会主義を守り抜くことができない—一部の国々で社会主義が崩壊した過程が見せてくれる教訓」『勤労者』1995 年第 6 (累計 638) 号、90-91 頁。
- 44 同上、95 頁。
- 45 李三檣「国交正常化のための朝日政府間の会談について」『勤労者』1993 年第 3 (累計 611) 号、84-90 頁。李栄哲「朝鮮で敢行した日帝の野獸的罪行(1)」『勤労者』1993 年第 3 (累計 611) 号、91-96 頁。李栄哲「朝鮮で敢行した日帝の野獸的罪行(2)」『勤労者』1993 年第 6 (累計 614) 号、91-96 頁。
- 46 金奉哲「ブルジョア議会制の反動性」『勤労者』1996 年第 11 (累計 655) 号、91-96 頁。崔哲雄「ブルジョア民主主義の反人民的性格」『勤労者』1996 年第 12 (累計 656) 号、85-89 頁。金得三「資本主義経済の新たな構造的矛盾と沈滞」『勤労者』1997 年第 1 (累計 657) 号、92-96 頁。李奉鶴「資本主義社会は『富益富、貧益貧 (筆者注：富める者は益々富み、貧しい者は益々貧しい)』の反動的な社会」『勤労者』1997 年第 6 (累計 662) 号、92-96 頁。
- 47 朴極相「社会主義へと進み行く人民達の志向は妨げるのでできない歴史の流れ—資本主義が復帰した国々における社会主義再生のための動き」『勤労者』1996 年第 3 (累計 647) 号、91-96 頁。
- 48 崔光「親愛なる金正日同志を最高司令官に奉じたわが軍隊と人民は必勝不敗である」『勤労者』1993 年第 7 (累計 615) 号、24-31 頁。朱道日「親愛なる金正日同志は非凡な軍事的叡智と卓越した領軍術を持たれたわが革命武力の最高司令官であられる」『勤労者』1993 年第 7 (累計 615) 号、32-38 頁。崔仁徳「親愛なる金正日同志は無比の胆力と鋼鉄の意志を持たれた偉大な霊将であられる」『勤労者』1993 年第 7 (累計 615) 号、39-45 頁。
- 49 朴在京「敬愛する最高司令官金正日同志はわれわれの革命武力を無敵必勝の強軍へと育てられた稀世の霊将であられる」『勤労者』1997 年第 2 (累計 658) 号、39-45 頁。
- 50 崔光「革命武力建設で新たな転変をもたらした非凡な領導」『勤労者』1994 年第 6 (累計 626) 号、79-88 頁。
- 51 崔光烈「われわれ式社会主義は人民大衆の絶対的な支持と信頼を受けた不敗の社会主義」『勤労者』1994 年第 12 (累計 632) 号、22-27 頁。
- 52 脱北者問題については、拙稿「脱北者問題—「駆け込み」の意味を中心に」小此木政夫・磯崎敦仁共編『北朝鮮と人間の安全保障』慶應義塾大学出版会、2009 年、139-160 頁。脱北者インタビューの有用性と限界については、崔奉大「脱北者面接調査方法」慶南大学校北韓大学院編『北韓研究方法論』ソウル：ハヌル、2003 年、306-334 頁が参考になる。
- 53 蓮池薫『拉致と決断』新潮社、2012 年、107 頁。
- 54 同書、147 頁。
- 55 藤本健二『引き裂かれた約束—全告白・大将同志への伝言』講談社、2012 年、61 頁。
- 56 同書、133-134 頁の訳文を使用。